

(II) 同「部落財政と部落結合」（同上、第十輯、三五年）、即高橋、河村「村落部の社会構造」（佐藤智雄編「地方都市」東京大学出版会、三六年所収）がそれである。

(I) の論文では、当時の同族論を基礎視角にすえて村落構造の展開史をみようとする一部の見解に對して批判的に、土地所有を基礎視点にすえて村落構造展開の二つの型を明らかにしつつ、農地改革によつて生み出された村落構造の原型を把握しようとした。

ひとつは、山間地帯の山林所有や同族団、重立一小前の身分支配と結びついた地主制を基礎にした村落構造展開の型でその戦後的变化の停滞性を指摘した。もうひとつは、戰前における平場地帯における農民的生産力の前進を通しての小作争議の昂揚と連立支配の打破を経験しつつ、農地改革後自作的に再編された新しい部落秩序をもつた型である。このように把握された原型的構造の変動の可能性についても、經營の展開、兼業化、行政支配の三つの側面から指摘しておいた。

II、(I) の論文は、市域約一五〇の部落（回答は九〇）の財政の量的な考察を多くの部落での廳取実態調査により補いつつ、地域の村落の共同体的構造に迫ると同時に、それが、地方行政を支え、地域の政治支配を成立せしめていく問題を論じている。

糸魚川市は、早川、海川、姫川の三河川の流域に開けた農山村、山村と一部の下流平坦部よりなり、全国有数の広大な市域を含んでおり、山と川による災害の常習的な豪雪地帯である。この自然条件の劣悪さが、強固な共同体的結合と複雑な部落慣行を生み出してきた。そして農業と農民生活は、この共同体的結合を基礎に無償労働としての賦役と多額の部落費によつて維持されてきた。

○自由報告 N

部落財政と部落結合——十五年の変化

高橋

明善

（東京農工大学）

昭和三三～三四四年、島崎、河村会員らと糸魚川市農村部の調査をおこない、いくつかの調査報告を発表した。(I) 高橋「部落構造展開の一類型」（東大教養学部「社会科学紀要」第九輯、三四四年）、

自治体行政と部落行政が典型的な形をとつて地方行政の二重構造をつくりあげている。市行政と、部落行政との相互補完的関係が、地域の政治支配を成立させる基礎でもあった。

これらの報告後、高成長期を含む十五年の変化の中で、地域の村落がどのように変化してきたかを考えるのが本報告の課題である。具体的には前回と同じように、全市域的な部落財政の量的調査と九部落での聴取調査を中心に検討したいと思う。

十五年の変化は、この地域の生産力的劣位性が明確化していく過程でもあつた。たとえば土地改良は殆んどおこなわれず、トラクターやコンバインの導入も皆無に近い。こうした地域の調査をおこなう場合、私は他地域との比較を念頭においている。村落社会研究第六集所収の拙稿は高位生産力地帯の報告である。そしてまた諸先輩とともにおこなつた、都市化地域や開発地域との比較も考えている。村落の類型的把握が必要であると考えているからである。そして糸魚川市のような後進地域の内部においても、都市化、労働者化、開発のさまざまな影響があらわれ、広汎な過疎地域やスプロール的都市化に包まれている地域もある。全国的にみても、農業と農村生活の矛盾のあらわれ方は多様であると同時にこの市域内でも多様である。

もうひとつ重要なことは、こうした後進地帯が、日本の農業生産の重要な部分をしめていることである。これらの地域を欠いて日本農業の将来を展望することは現段階では不可能である。こうした後進地帯である糸魚川市域においては、部落社会の共同体的構造が根強く存続しつつ、農業生産ならびに農民生活を支えてきた。その構造も、各種の部落運営上の慣行も決定的な変化を原理的に生み出しきる。

ているとはまちがえない。しかし、細かくみると、共同体的結合が、労働者化、都市化、過疎化によってゆらいでいる。そしてそのことが、農村内部から農業生産と農村生活の危機を深化させている。そうした危機の構造の深まりを「部落財政と部落結合」十五年の変化の追跡を通して考えてゆきたい。